

私の学生生活

大阪大学工学部醸酵工学科・修士二年

土方 康世

私が大学を受験するころは、工学部がずい分はなやかにみえたので、ぜひ受験したいと思い、家族の者に相談しましたところ、反対はされましたものの、どうしても行きたいと思いましたが、醸酵なら女の私にでもやって行けるのではないかと思い、受験致しました。

今の私の心境としては、醸酵に限らず、学問の道に進んでいて、本当に良かったと思っています。

しかし入学時から現在にいたるまでのことを思い出してみますと、私のように女子学生一人で男子学生の中で勉強することの、精神的圧迫は、私の場合に限らず、程度の差こそあれ、一応、大きな壁だと思っています。

このようなことなどからも考えあわせてみますと、戦後の福音のようにも思われる女性への大学の門戸開放は、女性の社会的地位を高める一つの突破口のように思われます。

けれども私のような場合は、必ず、少くとも四、五人の女性同好者が必要なのではないかと、思っています。といいますのも、学問以外の無駄な苦勞で、学問から脱落する危険を感じたからです。

私にとって、学問は、いつでも、どこでも、意志と努

力のある所に待っていてくれるように思われましたが、折角学問をすべき良い場所についても、環境が自分に適していない限り、目的は全く出来るものではないということ、痛感させられたからです。

しかし、このことは、男性の場合にでも時によっては起りうるのではないかと思います。

何故ならば、男性の中で女性一人とか、女性の中に男性一人とかいう状態におかれますと、慣れるまでの間に、何ということもなく、ひしひしと劣等感におそわれるように思われるからです。私の場合その気持がやがて憂うつなものになり、孤独感で自分の人間性を失却するのではないかという恐れをも抱くという、大学入学までは、思いもかけなかったようなことにおつかり、全くあわてさせられました。ですから日常生活にさしつかえる、このような精神状態から何としても脱却しなくては、折角の平等への仲間入りも、対等な学校生活の味わいも、新鮮な学問の喜びも知らずに終わってしまいそうに思われ、これでは誰にともなく申しわけないと、一人力み頑張ったものです。

しかしながらどうしようもない脱落感により、焦燥感とひがみと自我意識ばかりをつのらせ、自己嫌悪でいたたまれなくなるような毎日を、送ることとなりました。

また男女平等とはいうものの、昔から女性は学問に向いていなかったのではないかしらと、女子学生の皆様からお叱りを受けるようなことまでも、考えられるようになり、暗い方へ、暗い方へと進んだものです。

このような少々、ノイローゼ気味の毎日は、授業態度から致しましても、どんどん遅れはじめ、男女平等など入学当時の夢物語にすぎなくなり出し、あえなくついえさりしました。

人間的にはもちろん、人格的にも大いに力量不足の、私自身を嫌悪するほどに自分というものを知って参りますと、私のどこからともなく、良心的な力がわいてきはじめまして、私を深く反省へと導きました。

そしてそれにより、これまでの私自身を、全て否定してかかるようになりました。このように一日も早く、いらぬものを捨てなければいけない、素直にならなくてはいけないと、思い直しかけますと、これも若さゆえに柔軟さがあつたのでしょうか、薄皮をはくように、心の片隅から晴々となり始めました。

自分の心境が、こんなふうに変り始めますと、いつも授業と一緒に受けている男子学生の方々の暖い人間性に、あらためて触れることができ、何かしら大きな拾い物をしたような気がし、本当に嬉しく思ったものです。

このような廻り道をしましたので、私は同学年の男子学生の方々より、大分遅れて本当の学生生活に入ったよ

うな気が致しました。

しかし、この私の苦い経験は、将来女子であるが故にぶつかるであろう壁に対しては、非常に役立つくれるのではないかと思います。

しかし、やっと精神面から立直った時には、当然のことながら、学問の遅れは如何ともし難く、またこれに苦しまなければなりません。

六三三制という制度の中で育って参りました私の勉強は、ただ習性が頼りのガリ勉に過ぎず、何かに目覚めかけていた私は、頼りにしていた勉強に対してまで、自己嫌悪を覚えるようになり、みじめこの上ない状態になりました。男子学生の方々が、いとも自然に学問を受けて立ってられる状態に比較して見ますと、私はまだ「お勉強」という言葉のムードの中からぬけきれていないあせりを覚えました。

然し、二度と精神的に参るような悩み方はすまいと、自分の心に決めていましたので、その方だけはくり返すことなく本当に助かりました。

また大学という処の学問の有難さでしょうか、高等学校までのようなことはなく、男子学生の方々の助けを借りたり、また私自身が自覚をしたことなどから、何とか単位をとることが出来、自分では、大学に不向きと思っているうちに、どうにか大学生活を送り、無事に終ることができました。

自分では大学生活を大変なことのようになって過して参りましたが、今となって考えてみますと、当然なことにおつかり、それと直正面にとつくり、苦しむことにより、当然のこととして或る期間をおいて立直ったわけですが、このことは、本当に私にとって、その後の私なりの姿勢を正させてくれ、私なりの大学像を確立させたように思われますし、また、その主体性というものも、目覚めさせてくれたような気も致します。

女性に対する大学の門戸開放というものの影に、こんなような伏兵がいようとは、思いもよりませんでした。

学年が進むにつれて、だんだんと、私というものと大学との関連が分って参りますと、女子学生ならではと思うほど、一人楽しく喜ばしいことを感じることも、出て参りました。

専門課程に参りますと、私なりに、毎日の体験を通じて、学問の本格的な意義というものを、知ることができるようになりました。そして女性故にかえってゆっくりと、落ちついて、あわてず取りくもうなどと、盲蛇におじずの余裕まで持てるようになりました。

一方、女子と小人は養い難しという言葉をかみしめ、反省してはいますものの、何時また足もとから鳥が立つようにあわてることに会おうことか、分ったものではあ

りません。

大学院学生となりましてからは、「女子学生亡国論」「女子学生締出し提案の論議など、女子大学教育の多くの矛盾など、私なりに解決出来るようになった気がいたします。しかし、これもあくまで私個人にとっての大学教育ということでして、女子大学教育とい一般論は、とうてい解決出来ません。と申しますのは、そこまで参りますには、女性故に解決しなければならない個人的、ことによると、余りにも個人的すぎるよなな問題が山積しているように思われるからです。

私は私なりに、何とか早く、人間としてまた女性としての人生感を確立して、これらのことを、一つずつあせらず整理してかからねばと思っております。

結局、私は、前方を見つめながら、私なりに最善と思う事を実行し、先生方ならびに先輩の方々のご指導を頂きながら、まじめにやって行きたいと思っております。